
マジカルウォーズ

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカルウォーズ

【Nコード】

N5096N

【作者名】

マテマテフェイ

【あらすじ】

少年はある者を殺す為に、禁断の力を手に入れる
だがその為に流した血は、少年をさらなる闇へと引きずり込み
そして世界は、再び闇へと包まれる

第1話なのはを狙うもの(前書き)

これは真魔導戦記Seoulの続きです

第1話なのはを狙うもの

「あれがターゲットだね…」

「なのはさん、こっちは準備完了です」

「わかったよ、それじゃ始めようか…」

なのははレイジングハートを出しターゲットに向け魔力砲を放つとターゲットは機能を停止する。

「あれが時空管理局のエース・オブ・エース、俺の復讐の対象か…」
(マスター流石に勝ち目はないと思いますが…)

「なにも馬鹿正直に戦わなくてもいいんだ。どう戦おうとも最後に俺が勝てばな…」

少年は笑い、その場から去る。

「ヴィータちゃん、後の事よろしくね」

「ああ、わかってる。この後はなにかあるのか？」

「えへへ、ちょっとね…」

なのはは笑いながら言うとかかとても強い魔力を感じる。

「なのは、気をつける…」

「わかってるよ。スバル、ティアナまだ気を抜かないで何かがいる…」

なのはに言われスバルとティアナも周りを警戒し始める。

「成程な…エース・オブ・エースと言われるだけはある」

(やはりあなたでは勝ち目がないと思うのですが…)

「言っただろ。今回はただ奴の能力を調べに來ただけだ。それにどれだけ強かろうと所詮は人間なんだどこかで必ずボロが出るさ」
少年が言うと一緒に魔力砲がなのはに向けて撃たれる。

「私を守って星の輝きよ!!」

「スターフィールド展開」

なのはの周りを魔力のカーテンが包み全ての砲撃を無効化するが、それと同時に投げられた石はなのはの片目へと当たり血が出る。

「なのは平気か…」

「私は平気だよ。それよりヴィータちゃんとは叩けた？」

「こっちは平気だ、急いで戻るぞ」

ヴィータはなのはを持ち戻って行く。

第1話なのはを狙うもの（後書き）

なのはの命を狙うものそれは…

次回第2話過去の過ち

それに気付いた時、彼女の心は碎かれる

第2話過去の過ち（前書き）

人が生きる上での当たり前の感情

第2話過去の過ち

第1管理世界ミッドチルダ西部工業地帯跡

「おし、着陸するぞ…」

なのは達を乗せたヘリコプターは着陸し、なのは達は地面へと降りる。

「それじゃ、ヴァイス君また後でね」

「了解しました、なのはさん達も気を付けて」

なのは達は念の為にBJを装着し奥へと進んでいく。

「それにしても復旧作業全然進んでいませんね」

なのは達の目の前には壊れたデバイスの破片や魔力弾が転がっていた。そして所々には時空管理局の制服も落ちていた。

「急ごう…まだいるかもわからないけど」

なのは達は先を急ぐ。

「侵入者だと…」

「うん、今はまだエリアBにいるけどね」

「ちっ…スイクの野郎、面倒事押しつけやがって…おい、動けるのは誰だ」

「ロードかな」

女の子が言うのと目の前にいる男は銃を握る。

「スイクの野郎は…」

「それが連絡がつかないんですよ…」

「本当に舐めた野郎だな。ウィン、スイクを探し出せ。下手をしたら面倒なことになるかもしれねえ」

「でも互いの事には一切干渉しないって言ってたよ、向こうは」
ウィンが言うのと通信が入る。

「ヴァイル、聞こえるか…」

「スイクお前覚悟はできているんだろうな」

「後で罰は受ける。それより侵入者の情報をくれ」

「ちっ：仕方ねえウィン奴のデバイスに送ってやれ」
ウィンは頷きデータを送る。

「確かに戴いた、だが俺は…」

「単独行動を取るそう言うんだろう」

「わかつているなら話ははやい。俺は高町なのはを殺せばそれでいい」

「つまり他の魔導師を俺たちが相手しろ。そう言う事だな」

ヴァイルが言うときイクは頷く。

「まあいいか、そろそろ暴れたいと思ってたしな」

「なら交渉は成立と言う事だな」

「それと高町なのはを完全に殺したいならポイントA542へ誘い出しな」

「それは干渉か…」

スイクが聞くと電波が乱れる。

「ちっ：時空管理局の魔導師風情がやってくれるじゃねえか。おい、ウィン後は任せたぜ」

「了解です。ヴァイルはどちらへ」

「ロードにはポイントB324に行けと伝えておけ」

ヴァイルは飛び出し魔導師の元へと向かう。

「ロード聞こえていますか」

「何の用だ：今、私は座禅中だが」

「そんなのんきなこと言ってる場合じゃないですよ～～～侵入者です。ポイントB324に向かってください」

「了解した」

ロードは立ち上がり指定されたポイントへと急ぐ。

「ハアハア：あなたは一体…」

「俺は復讐者だ、高町なのはお前を殺す」

スイクは魔力拳銃をなのはに向ける。

「俺について来い」

「断ったら…」

「今、この場で殺す」

今の状態ではレイジングハートで撃つよりも向こうの拳銃のほうが早いそう感じたなのは黙ってスイクについて行く。

(ここは…私が二人を殺した場所…)

なのはの脳内にあの時のことが思い出される。

「止めてー」

なのはは叫ぶが目の前には幻覚が見えた。

「あの時あなたは救えたはずだ、俺の母さんと父さんを」

「止めて…」

「あなたは何故救わなかったんですか」

「違う…私は」

なのはの戦意がどんどん無くなって行く。

「私は救おうとしたでも…」

「あの二人が羨ましかった…そうなんでしょ、高町なのは」

「私は…あの二人を助けようとしたでも…体が動かなかったんだ」

なのはは涙を流し、レイジングハートを落とす。

「あなたはもう必要ないこの世界に…」

スイクが引き金を引くと、拳銃から弾が出てなのはの心臓部分を貫く。そしてなのはは血を出し倒れる。

「これはプレゼントだ、高町なのは…」

スイクは突然、出したバルディッシュをなのはの背中を刺し消えた。

第2話過去の過ち（後書き）

なのはを殺しても彼の復讐は終わらずある目的の為に行方をくらますとしてその頃ヴァイルと戦うスバルとティアナそしてロードと戦うヴィータ多くの魔導師が死んだこの場所で再び無駄な血が流れる
次回第3話彼らの目的

人の命の灯が消える時ある力が目覚める

第3話彼らの目的（前書き）

彼らの目的それは魔導文明の破壊

第3話彼らの目的

「どうしたずいぶんと弱いんだな、管理局の魔導師は…」
スバルとティアナは2対1なのに押されていた。

「ティア：どうする？」

「どうするもこうするも攻撃が当たらないんじゃないじゃ無理に決まってるでしょ」

ティアナは弾丸を入れ替えながら言う。

「お前達局の魔導師じゃ俺には触れられやしないさ、まああんなデ
イバイダー【魔導殺し】なんていう物騒なもんはないがな」

ヴァイルは銃を向けて言う。

「だがまあお前らを生かす理由も見逃す理由もないんだ、ここで死
にな…!？」

突然、音楽が部屋中に響き渡る。

「おい、グレアどう言うつもりだ。通信機でいいだろうが」

「そんなに怒ってばっかでは駄目ですよ」

「お前が俺に直接連絡を渡すんだ。くだらねえ事じゃないんだよな」

「ええ高町なのはでしたっけ、あの魔導師は死にました」

ヴァイルの携帯から聞こえる言葉に二人の魔導師はショックを受け
る。

「おい、そんなくだらない事を言う為に連絡を寄こしたのか」

「いいえ本当はトーマでしたっけ、あの少年逃げ出しました」

「おい：冗談だよな。あいつを何の為に捕まえたと思ってるんだ」

「そのついでと言っては何ですが彼が逃げ出した時に僕が慌てて防
衛メカを動かしたんですよね」

グレアは笑いながら言う。

「お前それを先に言いやがれ」

「と言う訳で駆除はよろしくお願いします」

「面倒事ばかり起こしやがっておい、そこの魔導師死にたくなけり

やこの中に入ってる」

ヴァイルはスバルとティアナを閉じ込める。

「さてどこから来るんだ：うおっ：」

スバルが叩くと同時にヴァイルは痛がる。

「ティア、あの人に効いてるよ」

「お前ら人の親切心は無駄にするつもりか？ 全て終わったら出してやる。それまでおとなしくしてろ」

ヴァイルはスバルとティアナに注意をして薬を飲む。

「相変わらず不味い薬だな。だがこれを使わないと使えねえしな、それじゃ暴れるかデイン」

ヴァイルが腕に持っているのは今までのような銃ではなく剣だった。

「R A M F 発動」

ヴァイルを何かが包む。

「ちっ：面倒だな一撃で終わらせるか：」

ヴァイルは向かってくる防衛メカ3機をターゲットにする。

「そんなとろい攻撃に当たるかよ、終わりだなまずは一体：」

剣を刺し機能を停止させると同時に別の防衛メカがヴァイルに向けて砲撃を開始する。

「たくっ：ご主人を狙う防衛機械なんて面倒なだけだな、後でグリアには罰が必要だな」

ヴァイルは愚痴をこぼし全ての防衛メカを壊す。

「本当にあいつには困ったもんだな、おい魔導師もう出ていいぜ」いきなりバリアが解けてスバル達は倒れる。

「トーマって誰の事ですか」

「お前らには関係ないだろう。こっちの問題だ」ヴァイルはドアへ歩いて行く。

「私達はどうするのですか？」

「好きにしろ俺は満足だ、もう：寝る」

ドアが開きヴァイルは出ていく、スバルとティアナはなのはに通信を入れる。

「おい：ウィン、グリアはどこだ」

「何か用があるとか言って出て行ったよ～～」

「あの野郎逃げやがったか…」

ヴァイルはソファアに座る。

「おい、ウィンあいつはどうした」

「ロードならまだ戦闘中のようだよ～～」

「そうかそれじゃ俺は寝る、何か用があつたら起こしてくれ」

ヴァイルはあくびをして自室へと戻る。

「この感じ間違いないこいつはシグナムだ」

「我らが障害となる者は切り捨てるのみだ!!」

「なっ切っ先が見えなかった」

ヴィータの左腕からは血が流れ出る。

「手加減はできねえな、行くぞアイゼン!？」

ヴィータが言うと同時にグラーフアイゼンは粉々になる。

「この状況はやべえ…」

ヴィータは何もできずにロードに斬られ地上に落とされる。

「ちきしょう：あたし何にも出来ねえただの足手まといじゃねえか」

ヴィータの視力もだんだんと落ちていき、もはやロードの姿を認識することもできなくなっていた。

「まずいな：もう体が言う事聞かねえ」

だがロードが迫ってきているのだけはわかった。

「情けねえな、鉄槌の騎士ともあろうものが手も足も出ないで負けるとはよ…」

ヴィータは迫ってくるロードの剣により胸を刺され全身から血を流し倒れる。

「ロード聞こえる～～」

「何の用だ、ウィン。今侵入者の一人を片付けた」

「それじゃ丁度いいね。今からグリアを探してきてくれる」

「了解したヴァイルは：どうしている？」

ロードが聞くとウィンは笑う。

「えっとね寝てるよ」

「そうか：スイクはいいのか？」

「あの子にはあの子の事情があるし今はグリアだけ連れてきて」
ロードは通信を切り飛び立った

第3話彼らの目的（後書き）

ボロボロのスターズ部隊そしてスイクはある力を手に入れる為海鳴市へと来ていた

次回第4話本当の名

スイクと言う名を捨て今少年は真の名を名乗る

第4話本当の名（前書き）

少年は自分の目的を探す為にある場所へと降り立つ

第4話本当の名

第1管理世界ミッドチルダ西部工業地帯跡

「なのはさん起きてください」

スバルは涙を流しながら心臓マッサージやその他にも色々とするが意識は戻らず血もまだながれ続けていた。

「スバル…聞こえる」

「うん、聞こえるよ。どうしたの…ティア？」

「今、ヴィータ副隊長のところにいるのだけど息をしていないの」

「えっ…ヴィータ副隊長まで…そんな…なのはさんも意識を取り戻さないんだよ」

スバルが泣きながら言う通信が入る。

「はい、スバルです」

「どうした元気ないな。なにかあったのか？」

「はい…それがなのはさんとヴィータさんが死んじゃったんです…」
スバルが言うのとヴァイスは黙りこむ。

「今はいち早く医者に見せるのが先決だな。急いで戻って来てくれ」
スバルは頷きヴァイスの元へと向かう。

「何だこのアラム音うるさくて寝られもしねえじゃねえか」

「ヴァイル…ロードから暗号通信だよ」

「ちっ…そんなことでいちいち起こすじゃねえよ。大体、お前なら解読できるだろう？」

「ロードのは無理だよ。アイル姉じゃないと…」

ヴァイルは暗号を解読し、再び自室へと戻ろうとする。

「あまり起こすじゃねえぞ、面倒だからな」

「うんそれはいいけどヴァイルのニードどうするの？」

「もう修理が必要なのか？」

「いやそう言う訳じゃないけど…」

ウィンが話していると何かが撃たれる。

「たくつうるさい野郎どもだな、あいつらどこの所属だ」

「今、呼びかけてるよ。こちらイングルスそちらの目的を教えてください」

「……………」

呼びかけに答えず砲撃を続ける。

「ヴァイルくくどうするくくく」

「抱きつくな気持ち悪い仕方がねえ実力でどいてもらうか…」

ヴァイルは自分自身の銃ニードを手に取り外へと出る。

「さてお前らが何者かなんて聞く気はない。俺たちの前に立ちふさがらなれ死んでもらう!？」

突然、左腕の感触がなくなる。

「何だ奴らの攻撃…ディバイダーでも魔導でもない…何なんだ一体!？」

反撃する暇もなくヴァイルは心臓部分を撃ち貫かれる。

「ガハッ…だが一撃ぐらいは喰らわせてやる…」

血を流しながら震える手で標準を合わせ撃つ。

「これで終わりだな、ディガイド!!」

ヴァイルを中心にし相手の戦艦を巻き込む形で一種のフィールドができるがすぐに消滅し再び痛みが走る。

「何だと…あの空間で動けるものだ…まさかお前ら…」

「時間の無駄だ、死ね!!」

ヴァイルは体から何かを取られ地上へと落とされる。

「ヴァイル…そんな…うわああああああ」

ウィンが主砲を構えると目の前に現れる。

「貴様は因子を持つものではない死ね…」

手を前に出し莫大な魔力砲がウインの目の前に迫りウインは光の中へと消えていった。

「目標クリア：帰還する」

男は敵を倒すと自分自身の戦艦へ帰還した。それと時を同じくし、スイクは海鳴市へと来ていた。

「俺が生きる意味…そして…」

あるお墓に花を添えスイクは銃を置く。

「これはもともと父さんのだ。そしてもう僕には必要のなくなった物…」

スイクはBJを解除し、一枚の写真を置く。そこには赤ん坊を抱いた一人の女性とその横で笑っている男性がいた。

「僕は高町なのはを殺したよ、でも本当にこれで良かったのかは分からない。だが確かなことは新たな悪意がミッドチルダに迫っている事、だから僕はもうスイクと言う名前を捨てる」

片方の目の色が赤くなっていく。

「僕はフェイン・テストロッサそして父さんと母さんの意思は僕が受け継ぐ。だから待っててね、全てが終わった時笑いあえるように…」

フェインは涙を流しミッドチルダへと急いだ。

第4話本当の名（後書き）

少年の復讐は終わったそして新たな想いを胸に今少年の本当の戦いが始まる一方その頃脱走したトーマはある少女と出会っていた

次回第5話続く悪夢

3年前の事件それは今も続いていた

第5話続く悪夢（前書き）

一度人を殺せばその連鎖からは逃れられない

第5話続く悪夢

「なのはさんはどうなんですか!!」

スバルは看護婦に辛く当たる。

「止めなさい、スバル!! 看護婦さんが困ってるでしょ」

「あっ：ごめん、ティア何か自分が制御できなくて：」

「謝るなら私じゃなくて看護婦さんでしょ」

「あっそうだねすいませんでした。取り乱してしまっ：」

スバルが謝ると看護婦は笑って集中治療室へと入っていた。

「ハアハア：なのはの容態は：」

「今は何とも言えません。でもエース・オブ・エースですよ、そう簡単にはくたばりませんって」

「今までのなのはならそうかもしれない。でも今のなのははきつと：」

ユーノが暗い顔を見るとヴィヴィオも涙を流す。

「なのはママ死んじゃうの、スウェンパパやフェイトママのように」

「平気だよ。ヴィヴィオ、なのはもスウェンもフェイトも必ず帰ってくるだから今は待ってようね」

ユーノが頭を撫でるとヴィヴィオは泣きやむ。

「それじゃ僕は用事があるから後はよろしくね。二人とも」

ユーノはヴィヴィオを二人に預けロビーに向かう。

「君がフェイン・テスタロッサ、なのはを倒した魔導師だね：」

「はい：そうです僕が倒しました。高町なのはを：」

フェインの目からは後悔の涙が流れていた。

「君は以前僕にあの事件の真相を知りたいと言ったよね」

「はい：でもあなたは教えてくれなかった。だから僕は自分で調べ、

高町なのはを倒したのです」

「そう、なのはをあんな危険な目に合わせたのも僕が原因だ。でも今の君ならわかるよね、なのはは君の両親すなわちスウェンとフェ

イトを殺していないと……」

ユーノが聞くとフェインは頷く。

「だからここまで来たんです。本当の事を教えてもらうためにそして僕が間違っていたら高町なのは生き返らせるために……」

「なら今こそ話すよ、あの事件の真犯人それはエダン・ファーン」
「!!!!」

フェインは驚く。それも無理はない、なぜならフェインはエダンから聞いていたのだから。

「つまり僕は……あいつの手助けをしたという事ですか……」

「そう言う事だね。それじゃ、なのはの病室に案内するよ」

「あっ……お願いします」

フェインはユーノについて行きながら考えていた。自分が騙されていた事、復讐などしても誰も喜ばないただの自己満足だという事を。

「ユーノパパそれ、誰？」

「フェインだよ……それで看護婦さんは？」

「あの私ですけどどうかなさったんですか？」

ユーノは看護婦に訳を話し集中治療室に入れてもらう。

「あれが……なのはだよ」

「わかっています」

フェインはなのはに近づき手を近付ける。

「本当はこの力は使っちゃ駄目なのかもしれないでも今は……」

フェインの腕から光の弾が出てなのはへと入り心臓の鼓動が聞こえるのはの目が開く。

「なのは……無事なんだね」

「ユーノ君……私……生きてるの？」

「そうだよ。そのフェインが助けてくれたんだ」

「あの時はすいませんでした。僕、騙されていてあのその……」

なのははフェインを抱きしめる。

「君がスウェン君とフェイトちゃんの子か、私は高町なのはよろしくね、フェインくん……!!」

「でも僕はあなたの事を一度は殺そうとしたんですよ」

「でも殺さなかった、君の中にまだ迷いがあったからでしょ」

フェインは黙り込みなのはを見る。

（僕は父さんや母さんが大事にしている者を壊そうとしていたんだな）

「どうしたのフェインくん何か考え事？」

「いやそう言う訳じゃありませんけど離してくれますか……」

「あっごめん何か懐かしい感じがしたからさ」

なのは慌てて離し、フェインを見る。

「確かに私はあの二人を殺してはいない。でも間接的に言えば私は殺しているのかもしれない」

「僕にもわかりましたよ。あなたは良い人だってだから僕はあなた達の傍にいちやいけないのかもしれない」

「それってどう言う事？」

「僕はあなたを殺す、その目的の為に多くの魔導師を殺しました。でもあなた達を見て思ったんです。父さんも母さんもそんな事を望んでいないって」

「それがわかったのならもう私達は仲間だよ」

なのははフェインに手を差し出すだがフェインはその手を握れなく首筋から紋章らしきものが伸びていた。

「うがああああハアハア……ガハッ……」

暴走したり、血を吐いたりフェインは自分で自分を押さえられなくなっていた。そしてその頃第3管理世界ヴァイゼン

（僕はどこまで逃げればいい、リリイも他の人もみんな殺された。そして残った僕はあの人たちに優しくしてもらったでも……！？）
走っているトーマの前にある男が現れる。

「初めましてになるかな、トーマ・アヴァニール……私はエダン・フ
アーイン」

「お前は奴らの仲間か」

トーマは小型のナイフをエダンに向ける。

「あいつらとは誰の事だ…」

「とぼけるな、リリイを殺し他のみんなも殺したあいつらの仲間だろう」

「君が言うリリイと言うのはこの女の子かね」

エダンが指を鳴らすとリリイが現れる。

「トーマ…」

「リリイ、声が…」

「うん、あの人に助けられて声が出るようになったの」

リリイはトーマへと抱きつく。

「よかったじゃないか。感動の再会と言う奴かな…」

「一体何を…!？」

トーマとリリイにエダンは指を向ける。

「さよならだ、危険因子。君達の存在は許されない」

指の先から魔力砲が出るが何者かに止められる。

「やはり邪魔をするか貴様ら…」

「エダン・ファーンあなたの悪行もここまでだ」

「黙れ死に底ないの魔導師風情が私に勝てると思うのか!！」

「あなたの攻撃は既に見切っているここでさよならだよエダン!！」

エダンの周りを七色の光が包む。

「私はこんな場所で死ぬ人間ではない、覚えておれ」

エダンは撤退しその場にはトーマとリリイそして二人の魔導師が残った。

「あなた達は一体…」

「僕達は時空管理局の魔導師それで君は何故ここに？」

「僕は逃げてきたんです。あいつらから…」

トーマが話すと二人は頷く。

「それじゃ急ごうあいつらが行動を始める前に…」

「私達にはそれを止める力があるのだから…」

二人の魔導師に続きトーマとリリイも転移する。

第5話続く悪夢（後書き）

エダンの目的それは全ての魔導師の排除そして暴走を始めたフエインその前にエダンが現れ：

次回第6話止まらぬ暴走

それに呼応するかのようにトーマも自我を失っていく

第6話止まらぬ暴走（前書き）

二人の魔導師の帰還それは同時に新たな戦いの幕開けを知らせていた

第6話止まらぬ暴走

第1管理世界ミッドチルダ魔導師に敗れたエダンは傷をいやす為に多くの魔導師からリンカーコアを盗んでいた。

「これだけ回復すれば平気だろう…だがまさかあの中であの二人が生きているとはな…」

血を吐き余分な魔力を捨て、体調を整えミッドチルダに来た時に感じた膨大な魔力反応がある場所へと急いだ。

「なのはさん…」

「わかってるよ。あの子はスウェン君とフェイトちゃんの子…できれば殺したくないけどこの禍々しいオーラは何？」

病院内からここに連れてくる際に腹部に食らった一撃は今でもなのはに痛みを与えていたが、なのははその事を言わずに今はフェインを止めるその意志で戦っていた。

「どう、傷は痛む？」

「あの、傷って何の事ですか？」

「君が捕まっていたときにつけられた傷だよ。もう平気だと思うけど…」

魔導師が聞くとトーマが急に苦しみだし模様が浮かびだす。ただし、その模様はエクリプス感染者のではなく二人の魔導師が一番恐れていたものだった。

「トーマ…!？」

「今のトーマには近づかない方がいいよ。触れた瞬間に魔導と命の両方を分断され下手をしたら死ぬ…」

魔導師は腕にある物を付けトーマの額を押さえるとトーマの姿はだんだんと元に戻って行き、そのまま気を失う。

「今はある力を入れて押さえてるけどまた暴走する危険は極めて高い。だから君がトーマのその優しさを忘れないようにするんだ。そうすればきっとトーマはそれに答えてくれる」

「うん：トーマの優しさは忘れないよ」

「そうか：わかったよ。それじゃ急ごう」

魔導師が歩き始めると突然、魔導師の内部に封印されている力が浮かびあがろうとし、魔導師は大量の血を吐くと同時に大量の人体には無害だが空気や木などには有害な魔力を放出する。

「ハアハア：」

「大丈夫：スウェン？」

「心配ないよ、フェイトそれより先を急がなくちゃ：」

何とか力を封じ込めスウェン達のは達の元へと急ぐと同時にスウェンは恐怖を感じていた。聖剣士の力が暴走するほどの敵がいることに。

「なのはさん：生きてますか？」

「うん私は平気だけど、ティアナは？」

二人があたりを見渡すと、ティアナは全身から血が出て体は動かずその場に倒れていた。

「うわあああああよくも：よくもティアを：！」

自分を押さえられずスバルはフェインへと向かうが何者かに刺され、大量の血を吐き、腕が片方持っていられる。

「スバル！！」

自分のデバイスを杖代わりにして立ち上がり、目の前のいる人を見るとなのはの中の憎悪が増す。

「あなたは：エダン・ファーン！！」

「久しぶりだな。時空管理局のエース・オブ・エース高町なのは一等空尉」

「なんであなたが生きてるの：確かにあの時、私は止めを刺した筈」
「なんで生きているか、それは君がよくわかっている筈だ。私は他人のリンカーコアを吸収して傷を治す。わかるだろ、あの場では息が絶えかけた魔導師が何人もいた、そのリンカーコアを盗み生き返ったという訳だよ」

光の槍をスバルから抜き取り笑いながら、なのはに向けて投げ飛ば

すとスバルの血がなのはの服に染みつく。

「おっと申し訳ない何分まだパワーの制御が不十分でね、痛くなかったかい？」

「平気です……」

「そうか、それで君は何故、まだ時空管理局にいる罪滅ぼしのつもりかね」

「そうなのかもしれません。でも、本当はあなたを倒す為なのかもしれない」

何も音を立てずに静かにレイジングハートをエダンへと向け、引き金を引く準備をする。

「フェイトちゃん達は無事なの……」

「あの二人の魔導師の事か、さあな!？」

突然、空から何かが落ちてきてエダンの右腕は斬り落とされる。

「クッ……意外に早かったな、聖剣士!！」

「エダン……何が目的だ。何故、フェインを狙う」

「私の目的を果たすにはちょうどいいのだよ。この世界から切り離された人種共はな」

右腕を再生させ、エダンはスウエンに向けて光の槍を投げるがスウエンは回避し、エダンに斬りかかるが途中で止まる。

「どうした、斬るのじゃないか……」

「お前の意思の中に何で、はやてやエリオその他の魔導師の意思が入っているんだ!！」

「お前ならわかるだろ、聖剣士。私はこの世界から忌み嫌われ生まれてきた、貴様と同じようにな!！」

「それはお前が感情を持ったからか？」

スウエンが聞くとエダンは何も喋らず、スウエンの腹部を殴り気絶させる。

「私に従えこの世界から切り離された者共よ」

エダンの言葉はトーマ、フェインに聞こえトーマとフェインはエダンと共に消えた。

第6話止まらぬ暴走（後書き）

連れ去られたトーマとフェインそして明かされるあの時の真実
次回最終話今は見えない道：

この真実をきっかけになのは達は時空管理局を脱退する

最終話今は見えない道（前書き）

なのはとスウェンそしてフェイト達が出会った意味それは仕組まれたことだった

最終話今は見えない道

「スウェン君……」

「おわつと……」

スウェンはなのはを受け止めスバルやティアナ達を見る。

「どうやらみんな無事らしいね」

「でもなんでもの中で生き残っていたの？」

「僕達にもよくわからないでもそれ以外の事ははっきりしたよ」

スウェンが言うとなのはは首を傾げ、頭の上には疑問符が現れる。

「僕となのはそれにフェイトそして闇の書事件。あれは全て仕組まれたことだったんだ」

「えっ……どう言う事？」

なのはが聞くと周りを囲まれる。

「あの裏切り者がクロノが君達を助けたのか」

「いやクロノ以外にもギンガやゲンヤさんが僕達に情報をくれた」

「やはりあそこで殺すべきだったか」

「これではつきりしたね。あの時の事件、首謀者はお前たちだな」

スウェンが言うと全員驚き戦闘態勢に入る。

「ただ一つだけ聞きたいことがあるんだ。ユーノ君は……」

「あいつならもう死んだよ。残念だったな、高町なのはそれにヴィヴィオあの子にはすぐに死んでもらった。また暴走でもしたら大変だからな」

「許さない……行くよ、スターフォース……！」

「スターシステムフル解放並びに刻印解放……！」

スターフォースに窪みが出て、なのははその窪みにレイジングハートを入れる。

「なのは……押さえて」

「なんでもあの人たちは……」

「向こうは組織なんだ。今、戦ったら僕らの負けは見えてる、今は

…生き延びるんだ」

「クッ…」

なのは下を向き悲しみを堪えながらスウエンの傍へと行く。

「僕は時空管理局を脱退します」

「それが何を意味するのか分かっているのだろうか」

「僕は犯罪者として追われるのでしょ」

「それまでわかっていながらあえて死ぬ道を取るか」

魔導師が言うときスウエンは転移魔法を使いスバル、ティアナ、なのは、リリィ、フェイト、スウエンは消える。

最終話今は見えない道（後書き）

時空管理局それ自体が悪そして真実の見えない中互いの心は離れ
次回新章第1話裏切りの裏切り
今新たな戦いに向け少しずつ世界が動き始める

新章1話裏切りの裏切り（前書き）

何が正しい事なのかそして何が正義なのかその真実を探し出す為に
世界を放浪する

新章 1話裏切りの裏切り

あれから1週間スウェン達は消えたフェイト、スバルの行くえを探していた。

「どこにもいない…そっちはどうなの？」

「魔力反応も感じないし、今のところはわからないよ」
なのははスウェンのところに降りてきて言う。

「どうしようか…でもこのままここで立ち止まっている訳には？」
突然、スウェン達が隠れている祠に子供が入ってくる。

「君、ここは危ないよ。早くお家に帰って…」

「お母さん…」

「へっ…!？」

なのははそのまま訳も分からず、子供に倒される。

「どうしたの…なのは？」

スウェンが来ると今度はスウェンをじっ…と見る。

「僕の顔に何か付いてる？」

しばらくして子供はスウェンに抱きつく。

「お父さん!!」

「えっ…どう言う事？」

「私とスウェン君の子供!？」

「そうなんだろうね…」

スウェンは少年を降ろし名前を聞く。

「君の名前は？」

「僕はスイク、本当の名前は知らない」

「そうなんだ…君のお母さんとお父さんは？」

スイクは二人を指さす。

「えっとそうじゃくて本当のご両親は？」

「だからあなたたちです」

スイクはそれ以外何も喋らない。

「ハア~~~~ともかくこの場所に置いて行くのはまずい一緒について来てくれる？」

スウェンが言うときくは頷く。

「ともかくここがどこかわかるなの？」

「私はよくわからないけどティアナならわかるんじゃないかな」

「ここはミッドチルダの最も端の地方です。えっと名前は忘れてしまいました」

「ここはローラン地帯、人間は近づいてはならない禁断の地です」
リリイが言うとき雷が落ちてくる。

「スウェン考え直してくれないかな」

「ごめんでも僕は時空管理局に正義があるとはどうしても思えないんだ」

「スウェンさん、なのはさんお願いします。どうか……」

「ごめんね、スバル私は真実を知りたいだからそこをどいてもらおうよ!？」

戦闘態勢に入ろうとするとBJが強制的に解除される。

「レイジングハート何が起きたの？」

「魔力結合が分断されました」

「えっ……それってつまり……」

「エダン……それにトーマか」

スウェン達の目の前にはエダンとエクリプスの進行が進んでいるトーマがいた。

「エダン……」

「ようやく真実を知ったか、聖剣士」

「あの事件の黒幕が時空管理局だとお前もどこかで協力している筈だな」

「心外だな、私はただ自分の望む事をしたただけだよ。それが結果的には時空管理局に使われたそれだけの話さ」

エダンが言うときフェイトはエダンのほうへと行くと姿が変貌する。

「サクリファイス……」

「何：まさか僕達が追っていたものはエダンが造り出していたのか」
「だがこのサクリファイスを造ったのはほかならぬ時空管理局さ、
そしてその元となったのは聖剣士。君の細胞だ」

「どう言う事だ、何を知っているエダン！！」

スウエンは聖剣士の力を開放し、エダンに問いかける。

「教えてほしいのかなら教えてやる。ただし黒鳥を差し出せ」

「黒鳥？」

スウエンが首を傾げるとスイクが怯える。

「どうしたのスイク？」

「お前が母さんと父さんを……！！」

「聖剣士その子を差し出せ。そうすればすべてを教えてやる」

「断る！！」

スウエンが言うのとトーマから邪悪な魔力が漏れ始める。

「エダン、僕は確かに真実を知りたいでもだからと言ってあの子を
渡す意味がない！！！」

「それがお前の答えか、聖剣士！！」

「僕の名はスウエンだ。聖剣士でも何でもない」

「ならスウエンここで死ねえええええ！！」

エダンは斬りかかろうとするが突如現れた女性に止められる。

「なっ：何故貴様がここに……」

「私がどこにおろうとええやろ、それよりや私の仲間達返して貰う
で……！！」

「なっ：止める闇の書の主：貴様ああああ」

エダンは抗うが次々と魂が抜かれて行く。

「ハアハア：貴様ら……！！？」

エダンが上を見るとスウエンの攻撃が見えた。

「じゃあなエダン……！！」

「私はまだ死ねはしない……！！」

エダンを切ったかと思うとスウエンのデバイスは元の宝石へと戻っ
ていた。

「どう言う事だ？」

「なんで俺の守ろうとするものを傷つける!!」

この場にいる全員の頭に声が響く。

「これはトーマの心の叫び!？」

「これが完全な融合体だ、私は聖剣士を超えるものをつくりだしたのだ」

「ふざけるな…エダン!!」

「カーンの最高傑作。聖剣士だが同時に失敗作でもあった。それが今こうして倒れるこれほど喜ばしい事はない」

スウェンは聖剣士の能力を完全開放し、トーマの放つオーラを打ち消す。

「エダン…今度こそ終わりだ」

スウェンが切り裂くとそれはフェイトだった。

「自らの仲間を切り裂く。仲間は貴様にとって大切なものじゃなかったのか？」

「エダン…ぐうううわああああ」

急に苦しみだし、血を吐く。

「スウェン君!!」

「平気だ…ハアハア…」

スウェンはデバイスを杖代わりにして立ち上がると何かが砕けた音がし倒れる。

「スウェン君…ねえ目を開けてよ、スウェン君!!」

なのはの涙はスウェンを伝わり地面へと落ちる。

「これで私を邪魔する者はいないさらばだ。エース・オブ・エース」
エダン、トーマは撤退して行く。

「なのはちゃん…」

「悲しんでなんかいられないよ、彼の場合は私達が受け継ぐんだ」
なのはが立ちあがるとスイクはスウェンの元へと行く。

「スイク…もうスウェン君は立ち上がらないんだよ」

なのはに肩を叩かれ、スイクは涙を流しなのはの横に来る。

「私に力があれば救えたのに…ユーノ君やヴィヴィオそれにその他の人たちも…」

「なのはちゃん今は落ち込んでいる場合やない」

「そうです、いきましよう。なのはさん」

「真実を見つけない…」

みんなに言われなのははスウェンに行ってきますの言葉を残し次の場所へと向かった。

新章1話裏切りの裏切り（後書き）

全てが仕組まれた事だとしてもなのは達は本当の答えを探しまだ旅を続ける

次回新章2話新たな世界への道

それが真実へと向かうのかは誰にもわからない

新章第2話新たな世界への道（前書き）

今回の話でフェインの正体そしてスイクの本当の名が明らかになります

新章第2話新たな世界への道

第3管理世界ヴァイゼンなのは達はエダン達の手がかりを得るために来ていた。

「どう：手掛かりは見つかった？」

「いえどこもかしこも壊れていて手掛かりどころか人一人いませんでした」

「そっちも同じ状況か：！？」

なのは達を突然、殺気が襲う。

「あなたは一体：」

「俺はヴァイル：そしてこっちはウィンだ」

「私は高町なのはそしてこっちはスバル・ナカジマだよ」

「驚いたな、エース・オブ・エースか：」

ヴァイルが言うその後ろから何者かが来る。

「あれは：トーマー！！」

「えっ：その声リリイようやく会えた：」

今のトーマの姿は元の姿に戻っていた。

「久しぶりだな：トーマ・アヴァニール」

「あなたは：ヴァイルなんでここに？」

「それを言ったらなんでお前がここにいるんだ。お前はあいつとエダンと共にいたじゃないか」

「あの人にとって人の命などどうでもいいものなんです。それよりスウェンさんはどこに：」

全員下を向く。

「スウェン君はもう死んだんだよ」

「そうだったんですか：」

「それでトーマは何しにここへ？」

「僕らの時空に戻る為だよ」

トーマの言葉に全員が驚く。

「僕とリリイは本来こことは異なるもう一つの世界ともいえる場所から来たんです。そしてその子も…」

「スイク君が…やっぱり君達の世界の私とスウェン君の子供なの？」

「ツバキ君は僕らの大切な仲間です、それと同時に…ある魔導師が残した力でもあるんです」

「それが…黒鳥？」

トーマは頷く。

「僕とリリイはある目的の為にこの世界へと連れてこられた」

「その目的は…この世界の消滅だろ…」

「そうそして彼は知ったんだ。この世界にはロストログアを超える力が眠る場所がある事を…」

「そしてそこに行くためには3つの光の力が必要、そして奴の持つフェインとツバキこの二人が融合することによって本当の力が目覚める」

ヴァイルが言うどエダンが来る。

「そしてそのピースは全てこの場に集まった…」

「あなたの思い通りにはならないよ。スウェン君はいないのだから」
「果たしてそれはどうかな…」

エダンの横に現れるのはあそこで死んだ筈のスウェンだった。

「さあ始めよう、新世界の幕開けだ!!」

「ぐうううううう」

「ぐわあああああ」

トーマとツバキは苦しみ始めフェインとトーマとツバキから何かが出てなのはの持つクライスへと集まる。

「今こそ我に従い神々の終焉へ導け!!」

スウェンが言うとその場にいた全員は現れた次元の扉へと吸い込まれた。

新章第2話新たな世界への道（後書き）

飛ばされた場所それは全ての記憶が眠る場所
次回新章3話神々の世界ヴァルハラ
真実それは…まだ誰にもわかりはしない

新章第3話神々の世界ヴァルハラ（前書き）

それは全ての記憶が交差し本来歩んではならぬ場所

新章第3話神々の世界ヴァルハラ

「起きて…なのは…」

「スウェン君…」

なのはが目を覚ますと目の前にはスウェンがいた。

「おはよう…なのは…」

「うん…おはようスウェン君それにしてもスバルやトーマ君達は？」

「今はいないよ皆」

「そうなんだ…でもなんでスウェン君が？」

なのはが聞くとツバキが来る。

「あっ目覚めましたか…母さん」

「おはようツバキそれにしてもここはどこなの？」

「ここはヴァルハラだよ。いや正確に言えば元々ヴァルハラだったと言った方がいいかな」

「でもなんでスウェン君が知ってるの？」

なのはが聞くとスバルとヴァイルが袋を抱えてくる。

「たくっ…お前買いすぎだろ」

「おいしそうだったじゃないですか…」

「本当いい勝負かもな。なあ、ウイン」

「でも嬉しそうだね、ヴァイル」

ウインに言われヴァイルは少し照れる。

「あっ起きたんですか、なのはさん」

「うん、おはようスバル…」

「おい、スウェン」

「どうしたんですか…」

スウェンが聞くとヴァイルはなにかをスウェンへと向ける。

「お前は这个世界について何を知っている…！」

「止める…ヴァイル今は这个世界にいるエダンを止めるのが最優先だろ」

「それもそうか…」

ヴァイルはしまいウインのほうへと行く。

「それでこれからどうするのですか？」

「まずはエダンの行方を探さないか！？」

スウェンは後ろに人の気配を感じ振り向くとおじいさんがいた。

「あなた誰ですか？」

「わしはコン、ぬし達こそ誰じゃ」

「僕はスウェン」

その後も自己紹介をしてコンは納得する。

「それでここへ来た目的は荒らす為ではないのだな」

「はい…エダン・ファーン。彼を止めるために僕達は来たのです」

「そうか…おぬしが聖剣士か」

「何故…それを！？」

スウェンが聞くとコンはあるものをなのはに渡す。

「おぬし達は世界を造り変えたいと思うか…」

「いえ…そんなことは…」

「やはりぬし達こそわしが求めた戦士じゃな」

コンは一人で頷く。

「おぬし達の探すエダンそ奴の目的は何じゃ？」

「この次元世界の破壊です」

「やはりか…だが彼奴がこの世界の真理に触れられるとは思えんがの…」

「なにかを知っているのですか？」

スウェンが聞くと目の前に宇宙が広がる。

「何だ、この空間…」

「ここは…全ての世界の記憶が眠る場所そして…」

コンが言うとは色々な世界のイメージがスウェンに入る。

「何だったんだ、一体…」

「あれは今もこの次元とは別の世界で起きている事だ」

「あなたは何者なんですか。そして何故、他の次元の事まで…」

「一つだけ忠告しておくぞ、スウェン君。お主が信じる者そして愛する者決して間違えるでないぞ」

スウェンに忠告するとコンはどこかへ去って行く。

「僕が信じる者そして愛する者か…」

「スウェン君急ごう…エダンの居場所は…」

「うん彼を止めよう…」

スウェン達はエダンの目的地へと向かう。

新章第3話神々の世界ヴァルハラ（後書き）

エダンの目的地それは…

次回新章第4話僕が守るものそして私が愛する者
二人の心はやがて一つとなる

新章第4話僕が守るものそして私が愛する者（前書き）

信じる者そして愛する者その二つがわかった時人は変わる

新章第4話 僕が守るものそして私が愛する者

ヘブン高原そこはでかい刀や盾などが落ちている高原。なのは達はそこへと来ていた。

「トーマ、力は暴走していない？」

「はい、一応は…それよりここ凄いですね」

「うん。でも急ごう、僕達の目指す目的地はもう少し歩いた場所だから」

スウェンに言われトーマはリリィと話をしながら歩いて行く。

「スウェン君…」

「うん、どうしたの？」

「いや…何か元気ないな〜と思って…」

「僕なら平気だよ。それよりもう遅いし、ここら辺で休もうか…」

スウェンが言うとなんなその場でしゃがむ。

「ご飯は確かスバルとヴァイルさんが持ってたよね」

「ああ、それで俺たちの目指す場所はどこなんだ？」

「この先にある終焉の地ラグナロクだよ」

スウェンが言うとなのはが横に来る。

「どうかしたのなの？」

「いや…寝る場所はどうするのかと思ってね」

「それなら心配いらないよ。クライス…」

「了解…」

スウェンがクライスに言うのとテントが4つできる。

「それじゃ…みんなで分けて使ってよ」

「えっ…スウェン君は？」

「僕は見張りだよ。何が来るのか分からないんだからね、行くよ…クライス」

「了解です、マスター」

スウェンはクライスを持ち、見張りをする。

(まだよくわからないし、皆を不安にさせたくはないしね…)

スウェンが考えているとコンが来る。

「また会ったのスウェン君や」

「はいお元気そうでなによりです。コン爺さん」

「なにか悩みごとか…」

「いえ…そんなことは…」

スウェンが言うところコンはスウェンへと近づく。

「成程な君の信じる者そして愛する者それで迷っておるのだな」

「はい…こう言う言い方は悪いかもしれないけど、今はいいフェイトを愛するよりも…」

「それはお主が決める事じゃ。高町なのはでもフェイト・T・ハラオウンでもな」

「僕が信じる者はもう決まっているんです…」

コンはスウェンの眼を見ただけでそれがわかったというよりコンはその眼に見覚えがあった。

「お主はアルガと言う男を知っているか…」

「えっ…それは誰なんですか？」

「お主の力の元となった男と言えればわかるかの？」

「それってつまり…」

スウェンが言いかけるとなのは来る。

「スウェン君も少し寝ないと体調、壊すよ？」

「僕は平気だからなのは休んでて」

「うん、そうする!？」

なのはが戻ろうとすると突然、体のバランスが崩れスウェンのほうへと倒れる。

「平気…なのは？」

「うん、ごめんね。スウェン君それで本当は一つだけ聞きたかったんだ」

「何を…？」

「今でもスウェン君はフェイトちゃんの事が好きなのかをね」

スウェンは突然の質問に驚き、顔が赤くなる。

「僕にもよくわからないんだ、でもまだきつと…フェイトの事が好き何だと思う…」

「私は…今でも君の事も好きだよ。スウェン君…」

「なのは…でも僕は…」

「いいんだよ、フェイトちゃんの事を忘れなくても私はね…」

なのはが言うとスウェンはなのはの肩に頭を置き寝てしまう。

「ようやくわかったみたいじゃな」

「コンさんいつからそこに…？」

なのはは驚き言う。

「お主には話してもええかもしれないな、その少年その誕生の秘密を」

「えっ…なんでそんな事を私に」

「君は純粹じゃからなそれでいて自分の信じる者はちゃんとしている。そして愛する者もな」

コンが言うとなのはは顔を赤くする。

「この少年にはなオリジナルがいるのじゃ」

「えっ…スウェン君のオリジナル…」

「そうじゃその子はそのオリジナルのクローンと言うのはあれじゃがともかく、その子にも同じ使命がある筈じゃ」

「その使命って何なんですか？」

なのはが聞くとコンは話し始める。

「この世界の再生じゃ…そしてその為には支えが必要じゃ」

「でも私は…彼を…」

「でも今でも好きなんじゃろ」

「それはそうだけど…」

なのはが言うとコンはなのはに渡したある物の話を始める。

「お主ならその子の支えとなれる筈じゃ、それにお主に渡した宝石があるじゃろ。それは聖剣士を支えられるものに渡すべきものなんじゃ」

「それってつまり私がスウェン君の支えになれるとそう言う事ですか？」

「一言でいえばそう言う事じゃ、わしはお主達を見たときアルガとコオンが帰ってきた気がしたのじゃ」

コンはなのはを見る。なのはは横で寝ているスウェンを見ていた。

「私がスウェン君の支えに…」

「お主ならばなれるならここで証明して見せればええんじゃ」

「私は…君と一つになる二人で乗り越えよう。二人ならやれるよ！
！」

クライスとレイジングハートが宙に浮かび、その間にスターフォースが入る。

「あなた達の思い確かに受け取りました」

「行くぞ…この世界を救うために今一度我らの力を貸そう」

「さあ私に触れてください」

なのはが触れるとスウェンから聖剣士の力が抜けスウェンは消える。

「えっ…そんな…スウェン君…！」

「平気じゃあの子は本当の使命の為に君に力を託したんじゃ」

「うん、なんとなくわかるよ。彼の鼓動も彼が歩んできた道も…」

「なら行くんじゃ、終焉の地ラグナロクへ…」

コンが言うとなのはは頷き向かう。

「ツバキお主も行くんじゃ」

「でも…この人たちは…」

「いずれこの世界も消滅する。その時にお主がいなくてどうするあの二人はお主の親じゃろう」

ツバキは頷きなのはの後を追いかける。

新章第4話僕が守るものそして私が愛する者（後書き）

本当の真実それはきつと…

次回新章第5話世界が全て消滅する日

本当の混沌はきつと訪れない

新章第5話世界が全て消滅する日（前書き）

二人の魔導師の激突そして時空の崩壊

新章第5話世界が全て消滅する日

終焉の地ラグナロク

「高町なのは：今さら来たところでもう遅いわ！！」

「エダン・ファーン・この世界を好きにはさせない私の命に代えても倒して見せる！！」

両者のデバイスは激しく火花を散らせそして激突により様々な世界に被害が出ていた。

「はああああああ」

「どうしたその程度で私を殺す気か笑わせるな！！」

エダンは左腕を前に出し魔力砲を放ちなのはを離す。

「母さん！！」

ツバキは飛んでくるなのはをキャッチしエダンを見る。

「親子そろって死ぬがいい：魔断斬光剣！！」

「させない：僕は母さんと父さんに会えたそしてまだこの世界は終わらせたくない！！」

エダンが魔法を放つとツバキはその魔法を受け止める。

「馬鹿な：ツバキ、貴様のどこにそれほどの力が」

「僕にもわからない：でもこの力は母さんと父さんが与えてくれたものだ」

エダンの放った魔法を消すとツバキの右腕が消える。

「そう言う事か：残念だったな。ツバキお前ではここでは息ができないようだな」

「それぐらい僕にもわかってたさ、でも僕は：例え別の次元の母さんと父さんだとしても守ると決めたから：僕が消えるまではね：」
ツバキは息苦しい様に言うそれと同時になのはは目を覚ます。

「ツバキ：」

「母さん：僕は：このみんなが生きる世界を守りたい」

「わかってるよ一緒に行こう。ツバキ：」

「僕はもしかしたら：いや何でもないよ、僕の力母さんに託す」
ツバキから何かが抜けツバキは笑顔で消えていく。そしてなのは
中にはツバキの意思が入る。

「貴様：何故だ、何故こんな物の為に命を投げ出す？」

「お主にはわからぬのか：」

「お前は：」

「ちっとは利口になったと思ったが全然成長してないようじゃな、
エダン：」

突然、現れたコンはエダンに向けて言う。

「黙れ：私はこの世界を滅ぼす、そして：間違った存在はすべて消
し去る！！」

「それが過ちだとまだ気付かんのか！！」

コンが言うとなのは達の周りに色々な世界の記憶が現れる。

「お主にはわかる筈じゃろ、エダン：」

「この世界は私と言う個体を否定した。なら滅びて当たり前だ」

「そんな野心の塊でこの世界の真理に触れられると思っているのか
！！」

「！！！！」

コンの姿が変わりエダンは驚く。

「何：貴様だったのかアルガ：」

「えっそれって：」

「騙すつもりはなかった。ただ君達なら止められると思っていただけだ」

コンいやアルガは天から一つのデバイスを取りエダンと対峙する。

「邪魔をするな：アルガお前じゃ死ぬだけだ」

「その野心が今も世界を壊していると何故気付かない！！」

二人の魔導師の激突によりだんだんと次元世界が収縮していた。

「何故だ：何故お前もその女を信じる？」

「彼女はお前にはない最強の魔法を持っている」

「最強の魔法だと：私に無くて彼女にか：」

「そうだ。そしてその魔法は時に世界さえ変える、彼女が私にしてくれたようにな…」

アルガが言うのとアルガの周りに魔力が集まる。

「人を好きになる事そして受け止める事それこそが世界を平和にする魔法だ」

「だが人はそれでも争い続ける…アルガ、お前の信じた心などどこにもないのだ」

「確かにそうかもしれないだが私はわかったんだ。彼は失敗作などではないと」

「だがカーンは奴が失敗作だと言ったんだ」

エダンが言うのとアルガは天に腕を上げる。

「人の心を持つのが失敗だというのならお前も私もすべての人類が神にとっては失敗作だ」

「いえそれは違います…」

「!？」

二人が驚くと空からノルンが現れる。

「神は人間を創ったことに誇りを持っています」

「ノルン…どうして君がここに…？」

「アルガ…今こそあの方の邪悪な意思を解き放ちましょう。私とあなたの力で」

「ああ、後の事は任せたぞ、高町なのは私達はもう眠りにつく…」

アルガはノルンの意思を体内に入れ、手に持っている剣でエダンを刺す。

「何…何故、抜けん!？」

「エダン…私が貴様を解き放つ。その憎しみごとな!!」

アルガが言うのと光になって行く。

「待って…」

「高町なのはもうすぐこの世界は全て消滅する。そして再生か崩壊そのどちらかが始まる、世界の意思をそして人々の未来を君に託す…」

「ふざけるな：我が死ぬことなどあつてたまるかああああああ」

「見苦しいぞエダン私とお前は本来この場にはならぬ存在」

アルガとエダンは消えながらなのは何かを託す。

「早く行け：そして人の希望そして幸せを教えるんだ！！」

なのはは頷き走り去ると同時に全ての世界は消滅した。

新章第5話世界が全て消滅する日（後書き）

全ての世界の意思を持ちなのははついに最愛の人の元へとたどり着く
次回新章最終話君の意思、私の思いそして二人の始まりへ
人の命の大切さそして人の生き方未来は数々の可能性へと分岐する

新章最終話君の意思、私の思いそして二人の始まりへ（前書き）

色々な可能性そして人の無限に交差して行く道ただ一度の判断で世界は多くの可能性へと分岐する

新章最終話君の意思、私の思いそして二人の始まりへ

「私…死んだのかな…」

指先の感覚はなく徐々に意識も遠のいていくが、かすかに頬に暖かい感触が触れる

「大丈夫、なのは？」

「うん、私は怪我はないけどここはどこなの？」

「ここは…本当は人間が触れてはならぬ場所、そしてこの世界の始まり…いや全ての記憶があるんだよ」

周りに突然、色々なデータが現れる

「あれは…私とフェイトちゃんそれに…スウェン君？」

「ここにはあらゆる可能性が、いや世界の分岐がある。僕と君があった世界もあれば、君は魔法にも何にも出会わず人生を過ごしていた場所も存在する」

「それで君は、なんで私をここに？」

「世界の修復を行う為と言えば、分かってくれるかな？」

スウェンが言うと、周りの台座に炎が灯る

「でも…私が決めていいの？」

「そうだよ…もうこの次元もそしてほかの次元にも、なのはしか生き残っていないのだから…」

「スウェン君は、生きているんだよね」

「僕はこの場所に記憶された、聖剣士の記憶の一部にすぎない」

スウェンが言うと、世界の崩壊が始まる

「なのは…時間がない、君の望む世界を思い浮かべて…」

なのはは目を閉じ、スウェンの言うとおりにすると、色々な場面が頭の中をよぎる

「見えたよ…皆が幸せで暮らせる世界、そして君と私の本当の始まりが…」

なのはが言うと、奥への扉が開き突如、現れたノルンがなのはを押す

「えっ…」

「あなたが望む世界を創造しなさい」

「ちょっと待ってください、ノルンさん!!」

なのはは言うが、扉は閉じ光の階段が目の前に現れる

「これを登れという事なのかな？」

なのはは警戒しながら、一段また一段と慎重に上がり、一番上まで来ると再び色々なデータがなのはを囲むように現れる

(なんなの、これ…)

なのはは周りを警戒しながら、進みある祭壇の前へと来る

「ここが…儀式の場所…」

なのはは頭に聞こえてくる、声の通りに作業を進めていく

「これで完了っ…」

なのはが最後にレイジングハートをくぼみに入れると、七色の光が祭壇から放出され再び、スウェンの姿が現れる

「君は本物のスウェン君？」

「そうだよ…なのは…それで君の望む世界は変わらない？」

「うん、変えないよ」

「その願い叶うよ、さあ目を閉じて…」

なのはが目を閉じると、スウェンはなのはの唇にキスをする

「スウェン君、一体何を!？」

なのはが赤くなると、色々な場所へと光が散って行く

「これは…」

「これが…創世の光だよ。そして…新たな旅立ちでもある、じゃあね…なのはあの世界でまた巡り合う日まで…」

スウェンが言うと、なのはとスウェンは光になりそして世界は元通りに戻りそして…新たな物語が始まる

新章最終話君の意思、私の思いそして二人の始まりへ（後書き）

なのはの望んだ世界そして新たな物語本当のプロローグはここから始まる

次回作は魔導新世紀リリカルなのはですほとんどオリジナルの話で進みます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5096n/>

マジカルウォーズ

2011年4月8日16時47分発行